38
2019.4

放送番組センターレポート

BROADCAST PROGRAMMING CENTER OF JAPAN Report

公益財団法人　放送番組センター
〒231-0021 横浜市中区日本大通 11 横浜情報文化センター
TEL.045-222-2881 FAX.045-641-2110　http://www.bpcj.or.jp/

公開トークショー　第16回人気番組メモリー『きょうの料理』

12 月 8 日、公開トークショー「人気番組メモリー」を開催した。今回は、昭和 32 年の放送開始から 60 余年、日本で最も歴史が長い料理番組『きょうの料理』を取り上げた。高度経済成長期以降の日本の家庭の食卓の進化を支え続ける番組の歴史を総ざらいするセミナーとなった。

【登壇者】
堀江ひろ子・ほりえさわこ（出演・料理研究家）
後藤繁榮（番組司会・フリーアナウンサー）
大野敏明（元チーフプロデューサー・NHK 放送文化研究所）
佐野朋弘（テキスト編集長・NHK 出版）

セミナー冒頭、番組でお馴染みの後藤氏の“ダジャレ”が話題に。大野氏曰く「少しでも肩の力を抜いて楽しみながら番組を見て欲しいという熱い思いが込められている」という。セミナー中、ダジャレを最低 10 個披露することが後藤氏に課せられた。

まずは、放送回数 15,000 回、レシピ数は約 40,000 品、出演した講師 1,300 人余りという、“長寿番組”を物語る数字が紹介された。テキスト総売上 4 億冊という数字に大野氏が驚いたと言うと、佐野氏は「想像ができない数字」と感想を漏らした。テキストは、視聴しながら書き取ることが困難などの要望に応え、放送開始から半年遅れて創刊された。近年は紙だけでなく、インターネットでの展開も行っている。

次に、映像を交えながら番組の歴史を振り返った。番組で最初に紹介したレシピは牡蠣のカレー。当初は洋食の紹介が多かった。堀江ひろ子氏は「和食中心の家庭料理は母親から習うもの。ハイカラなものをテレビで教えたいという思いからなのでは」と推測した。

その後テレビが普及すると各局が料理番組を放送し、この番組を含め多くのスター講師が生まれた。ひろ子氏の母・泰子氏もその一人。大野氏は「当時はまだ制作陣に専門的な料理の知識がなく、講師の指導を受けながら一緒に番組を作ってきた」と語った。

やがて女性の社会進出により、料理の時短化が求められる時代が到来。そんな 1983年に、ひろ子氏は番組に初登場した。20分以内に献立を仕上げる人気企画では、時間内に仕上げる練習をしたが、「終わるかどうか（視聴者を）冷や冷やさせるのが大事」と言われたという。時代はさらに下り、料理の楽しさを伝える多彩な講師陣が登場した。その流れで 2006 年に初登場したのが、ほりえさわこ氏。「授乳中だったのでスタジオに婆やとして（ひろ子氏が）来ていた」と当時を振り返った。セミナー中、堀江親子にはサプライズでそれぞれの初登場映像も公開された。

セミナー後半は、制作過程について語られた。約半年前に企画を練る作業から始まり、その後、講師と番組スタッフがレシピを考える。制作側の注文に応えるべく、堀江親子は家族を巻き込んで試作を重ねて完成させる。そしてテキストの撮影をし、放送約 2 週間前に収録をする。放送と同じ 24 分半ちょうどで終わらせるため、後藤氏が“妖精”と名付けた料理助手が陰で番組を支えている。それでも時間内に終わらないことや、肉を焦がすなどの失敗も時にはある。「生放送と同じスタイルで 60 年間撮っているのでやり直しは絶対しないと言われている」と後藤氏が明かす通り、綿密な打ち合わせや本番同様のリハーサルを行い、編集や撮り直しを極力しない工夫をしている。

冒頭で掲げた“ダジャレ 10 個披露”は、セミナー途中で達成。登壇者の裏話も交えたトークで、会場は終始笑いに包まれていた。

公開セミナー　第47回名作の舞台裏『科捜研の女』

２月２日、テレビドラマの制作者や出演者が自らの番組を振り返る公開セミナー「名作の舞台裏」を関内ホール（横浜市中区）で開催した。今回は、今年、放送 20 周年を迎えた『科捜研の女』を取り上げた。現行の連続ドラマでは最長寿番組であり、多くのファンを持つ人気シリーズのセミナーとあって、応募者は 4,700 名を超えた。

【登壇者】
沢口靖子・内藤剛志（出演）
戸田山雅司・櫻井武晴（脚本）
手塚治（SEASON1 ～ 10プロデューサー／東映）
関拓也（現ゼネラルプロデューサー／テレビ朝日）
【司会】藤田知久（放送人の会）

前半は、脚本家の戸田山氏と櫻井氏がそれぞれ選んだ作品（SEASON13／第５話・第７話）を上映。後半はゲストが登壇し、それぞれ番組への想いを語った。主人公のマリコを演じる沢口氏は、同一人物による主演、同曜日、同時間帯放送の最長記録を更新し続けている。沢口氏は「人生の半分近くマリコの人生を過ごしている。シーズンを重ねるごとに大人の女性として成長させてもらっている」と感謝の気持ちを述べたあと、マリコを演じる上で大切にしていることは「真実を突き止めるための情熱や信念を持って、どんな時にもポジティブで諦めない姿勢」と語った。SEASON2 ～ 4 ではプロファイラー・武藤要役で出演し、その後、土門刑事を演じるようになった内藤氏は「武藤は、作家として現在も生きているので、役が変わった訳ではなく、土門と並行して武藤という人間が存在する」とそれぞれの役への思いを明かした。

『科捜研の女』全 211 本(含スペシャル)中の約半分が脚本家の戸田山氏と櫻井氏の作品である。戸田山氏も櫻井氏も、そのクールにしか登場しなかったある役を再び登場させる、過去のエピソードとの繋がりをもたせるなど、１話完結のドラマでも、連続ドラマとしての連続性を大事にしていると述べた。

番組の基礎作りをした手塚氏は「今は“科捜研”と言ったら誰でも分かるが、番組を始めた頃は、この略称が通じるか不安だった」また「撮影で使う計測器などは、京都の島津製作所の協力により、本物の京都府警より二歩位前をいっているので、京都府警の科捜研が羨ましがっていた」と振り返った。

第１話目がレギュラー放送 200 本目になる今シーズンの『科捜研の女』は、４月から１年間通年放送されることが発表された。関氏は「通年放送は、脚本や演じる方々に苦労をかけるが、『科捜研の女』でないと、こんなチャレンジはできない」と意気込みを語った。

終盤では、沢口氏と内藤氏から、恋愛には発展しないマリコと土門の信頼と尊敬の強い絆や、他のレギュラーとのチームワークの良さが語られた。

放送 20 周年、テレビ朝日開局 60 周年、さらに、沢口氏は芸能生活 35 周年。会場からは、これからも『科捜研の女』を応援するという気持ちのこもった温かい拍手が送られた。

■ガチャピン・ムック展

1973 年に放送を開始した、フジテレビの幼児教育番組『ひらけ！ポンキッキ』から生まれたキャラクター・ガチャピンとムック。生誕 45 周年を迎えた二人の世界に迫る展示イベントを開催した。(12 月 14 日～ 2 月 11 日)

エントランスには、巨大なブラウン管テレビ型のゲートを設置し、放送開始当時を思い起こさせる演出で来場者を迎えた。会場では、まず 1973 年４月放送開始の『ひらけ！ポンキッキ』から、2018 年３月放送終了の『ポンキッキーズ』までの歴代「ポンキッキ」シリーズを、写真・年表・小道具・衣裳の展示と貴重な映像で振り返った。続いて、番組から生まれたヒットソングが流れる中、ＣＤほか懐かしいグッズの展示、また、恐竜の子どもであるガチャピンの進化の過程を紹介する愉快な展示、ガチャピンがあらゆる“難関”に挑戦した「ガチャピン・チャレンジ」、現在放送中の初の冠番組『ガチャムク』(BS フジ) の紹介､そして最後は､ガチャピンのネット上での活動をタブレットで紹介するなど、まさに 45 年の歴史を感じる展示会となった。

会場には、子供の頃に番組を楽しんでいた 20 ～ 40 代や、『ガチャムク』のファンである子供連れなど幅広い世代が来場し、「大人から子供まで楽しめる内容だった」「放送当時見ていた懐かしい歌と映像を、再び見聞きすることができて満足した」などたくさんの感想が寄せられた。

■ 阪神・淡路大震災上映会

1月14日、情文ホールで「放送が伝えた被災地ボランティア　～阪神・淡路大震災から24年～」と題した、5回目の「番組を視聴する会」を実施した。2018年は各地で大地震や豪雨などによる災害が発生し、“ボランティア”が話題になったことから、今回は被災地のボランティア活動を取材した番組を中心に7本を選んだ。来場者数は102人。取り上げた番組は次のとおり。

「Space2002　あったかいもん食べよ！　長田の肝っ玉ボランティア」(2002／サンテレビ)、「ザ・ドキュメント　震災15年　神戸・御蔵通からまだ見ぬ復興の夢を追って」(2010／関西テレビ)、「阪神・淡路大震災から15年　ラジオが伝えたこと・そして、伝えること」(2010／ラジオ関西)、「ラジオ深夜便　明日へのことば　被災地の歴史資料を守ろう！　奥村弘」(2013／NHK)、「NNNドキュメント’15　阪神・淡路大震災から20年　ボランティア黒田裕子　被災地への遺言」(2015／読売テレビ)、「映像’15　未来を守りたい　舞子高校環境防災科の生徒たち」(2015／毎日放送)、「報道特別番組　定点観測　～被災地・変容の記録～」(1996／読売テレビ)

■ ACC 入賞作品発表会

3月21日、情文ホールで「2018第58回ACC東京クリエイティビティ・アワード入賞作品発表会」を実施した。これは、1961年に創設された「ACC CMフェスティバル」を2017年に改称し審査対象を拡大したもので、国内で最も規模が大きな広告賞として広告クリエイターたちの目標となっている。

今回は、テレビCMとラジオCMのすべての入賞作品をはじめ、全6部門10カテゴリーのうち、5部門9カテゴリーのグランプリ受賞作品を紹介。合計259作品、延べ531本のCMを6時間20分にわたり上映した。来場者数は143人。

■ 東日本大震災関連番組のNHK・民放合同上映会を仙台で開催

仙台のNHK、民放テレビ局と放送番組センターが連携し、3月22～24日にNHK仙台放送局内の公開スペースである定禅寺メディアステーションで、「NHK・民放 番組上映会2019～テレビが伝える東日本大震災～」を開催した。上映した番組は各局が制作したドキュメンタリー17本で、一部を除き、放送ライブラリーの公開番組の中から各社の番組をピックアップしたものである。各番組の権利者から著作権等の許諾を得て、横浜の放送ライブラリーと仙台の会場とをインターネット回線で結び、ストリーミング送信して上映を行った。

23日には、コーディネーターに柳澤秀夫氏（元NHK解説委員・フリージャーナリスト）を迎え、各社の報道担当者によるトークセッションを行った。3日間の来場者数は677人。

■平成31年度事業計画・収支予算決定

2月21日開催の第2回理事会で、平成31年度事業計画・収支予算を承認した。概要は次のとおりである。

◇放送やアーカイブ活用を巡る環境の変化、議論を注視し、将来のライブラリー事業拡充に向け、「次期5年間(平成30～34年度)の事業方針」に基づき、着実な取り組みを継続する。

◇重点項目は、「公開番組の一層の増加」「事業の全国展開」「放送事業者の理解・協力の推進」「番組視聴システム更新計画の策定」とする。

◇番組の収集・保存・公開は、保存対象番組の着実な収集と公開を推進し、保留中の番組の権利処理作業促進により公開番組の増加を進める。

◇全国展開は放送事業者との連携強化により協力、支援を得ながら事業の拡充をめざす。具体的な提携先としては、阪神淡路大震災の被災地と沖縄を対象とする。教育利用では大学利用校を増やすとともに、中学・高校における利活用について検討する。

◇企画展、公開セミナー、番組上映会の通年開催や事業の存在感を高めるイベントの効果的な開催により、放送文化に対する一般の理解を深める。

◇2020年度に予定する番組視聴システムの更新計画をとりまとめる。

◇収支予算は経常収益3億7,385万円、経常費用3億7,380万円を計上する。

■ 第27回放送番組収集諮問委員会

3月20日に第27回（平成30年度）放送番組収集諮問委員会を開催し、事務局から以下の6項目について報告した。

(1) 「放送番組収集基準」の適用状況について
(2) 番組の収集、保存、公開状況について
(3) サテライト・ライブラリー及び大学での利用状況について
(4) 平成31年度事業計画、収集予算について
(5) ジャパンサーチへの連携状況について
(6) 著作権法の一部改正について

事務局の報告を踏まえて、委員から以下のような意見、提言があった。

◇収集保存公開番組の充実

保存公開本数を更に拡充していく方途を検討していく必要がある。また、全国にネット配信が整備されつつある中で、“地域”が重要なキーワードとなってきていることにも注視し、各局制作の地域に関連する番組をアーカイブしていくことが必要である。

◇教育での活用について

これまでに収集した番組資産を教育に活用していくということと、その活用の仕組み作りを推進していくことは、極めて重要である。また、中・高校生の段階で、放送文化や放送番組の素晴らしさを知ることは非常に有意義であり、今後は中学・高校の授業でも番組を利活用していくことが重要である。

■ 図書館および大学での番組利活用

［ 津山市立図書館 ］

岡山県の津山市立図書館視聴覚室にて、「津山線開業 120 周年記念上映会」と題した上映会が 12 月 21 日、1 月 26 日、3 月 23 日の日程で開催され、放送ライブラリーの公開番組が利用された。上映されたのは、連続ドラマ「吉井川」(1972.10.2 ～ 1973.3.31、全 156 回 /TBS）のうち第 1 ～ 5 話。津山市出身の作家･棟田博氏の「美作ノ国吉井川」を原作とし、明治の鉄道開通の時代に津山を流れる吉井川の回漕問屋を継いだ女性・村田りんの、波乱の人生を描いたドラマである。参加者からは、「こういうテレビドラマがあるとは聞いていたが､初めて見て感動した」「懐かしかった。全話見たい」などの感想があった。

［ 鳥取県立図書館 ］

1 月 11 日より鳥取県立図書館郷土資料室に個別視聴ブースが常設され、NHK や地元民放局が制作した鳥取県の文化や自然などに関連するテレビ番組 30 本の視聴が開始された。同館の要望に応じて、番組の追加を行う予定。主な番組は以下のとおり。

「新日本紀行　鳥取」(1966 ／ NHK)、「ふるさとの伝承　大山さんの水信仰　鳥取県伯耆地方」(1995 ／ NHK)、「残されていた兵事日誌～鳥取･旧二部村が伝える戦争～」(2010 ／山陰放送)、「新ふるさと百景　鳥取漆器の復活をめざして」(2016 ／日本海テレビジョン放送)、「夢のはじまり～甘くてしょっぱい　かりんとう人生～」(2012 ／山陰中央テレビジョン放送)

［ 早稲田大学 ］

平成 30 年度後期、早稲田大学文化構想学部の鳥羽耕史教授が､文芸ジャーナリズム論系の授業「日本近代文学とマスメディア 2」で、放送ライブラリー公開番組を利用した。授業の概要は､「作家・安部公房の詩・小説・演劇・映画・写真・ラジオドラマ・テレビドラマなどの多岐にわたる活動のうち、ラジオとテレビに関わるものに焦点を当てる」というもので、安部公房が脚本を手がけたラジオ・テレビドラマ 7 本が利用された。番組は以下のとおり。

「棒になった男」(1957 ／文化放送)、「ミュージカルコメディー　こじきの歌」(1958 ／ CBC ラジオ)、「日本の日蝕」(1959 ／ NHK)、「放送劇　吼えろ」(1962 ／ ABC ラジオ)、「チャンピオン」(1963 ／ RKB 毎日放送)、「東芝日曜劇場　虫は死ね」(1963 ／北海道放送)､「近鉄金曜劇場　目撃者」(1964 ／ RKB 毎日放送)

■ 2018.12 ～ 2019.2 の公開番組

【テレビ番組】

『ウォッチン！プラス SP　海風に舞う石巻・十三浜　神楽とともに生きる人々』
2015.6.6 ／東北放送

『大科学実験〔1〕 音の速さを見てみよう』
2010.3.31 ／ NHK

『花咲舞が黙ってない〔1〕』
2014.4.16 ／日本テレビ放送網

『バカリズムの風×桶』
2017.1.27 ／テレビ信州

『六輔　命を語る旅』
2012.5.26 ／山梨放送

『FNS ドキュメンタリー大賞　黒声の記憶』
2016.5.28 ／鹿児島テレビ放送

【ラジオ番組】

『SCRATCH　線を引く人たち』
2017.12.29/RKB 毎日放送 ,TBS ラジオ

『夏井いつきの一句一遊 17 周年記念特別番組　俳都まつやま四庵めぐり　百年先へ繋がる無限の五七五』
2018.5.26 ／南海放送

このほかテレビ 109 本、ラジオ 10 本。

新公開番組 PICK UP!

日本のチカラ つかまれ！のぼれ！カエルと少女とシュロの糸

2016.9.26/ 山口放送、民間放送教育協会
ディレクター：田村康夫
プロデューサー：竹村昌浩、雪竹弘一

山口県美祢市で生まれ育った藤原結菜さんは、小学 3 年生の時、田んぼ横のコンクリートの側溝で水に流されるカエルの姿を見た。U 字溝の壁面が垂直に立ちはだかり、落ちたカエルは這い上がることができないのだ。結菜さんは「なんとかしてカエルを助けたい」という気持ちから、カエルが地上に這い上がれるよう、シュロの木の繊維を束ねた命綱『お助け！シュロの糸』を発明した。この番組は、発明までの 3 年間を振り返ると共に、その後の様子を取材したもので、小さな命をきっかけに、さまざまな人との関わりを通して広がっていく少女の世界を見つめた。

「カエルを助けたい」という純粋な思いから、小学生が命綱を発明したという事実もさることながら、自ら 100 匹以上のカエルを集め、ジャンプ力などのデータをグラフ化して分析するといった、大人顔負けの丁寧な研究にも驚かされる。こうして出来上がった命綱を、1 人でも多くの人に広めるにはどうしたら良いか、結菜さんは自分で考え、行動した。その熱心な姿に近所の農家や専門家、自然保護団体などが心を動かされ、結菜さんだけでは成し遂げられなかった、ある大きな出来事が実現することになる。番組のラストで、新たな目標を語る結菜さんの、キラキラと輝く瞳が印象的なドキュメンタリー。第 58 回日本科学技術映像祭　内閣総理大臣賞受賞。

◆放送ライブラリー公開番組数
テレビ番組 16,771 本／ラジオ番組 4,500 本／テレビ・ラジオ CM11,382 本／劇場用ニュース映画 2,683 項目（2019.3.31 現在）